

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念

序

南宋、羅大經の撰に係る『鶴林玉露』は、數多著された宋代筆記類の中でも少々特異なものと言える。『四庫全書總目提要』は『鶴林玉露』を評して次のように言う。

鶴林玉露十六卷、兩江總督採進本、宋の羅大經の撰。

大經字は景綸、廬陵の人。事蹟考ふる無し。惟だ記す所の「竹谷老人畏説」の一條に、「同年の歐陽景顔」の語有れば、嘗て第に登るを知る。又た「高登 秦檜に忤ふ」の一條に、「容州法曹掾と爲る」の語有れば、嘗て嶺南に官たるを知るのみ。其の書の體例 詩話・語録の間に在り、議論に詳かにして考證に略たり。引く所朱

後 藤 淳 一

子・張栻・眞德秀・魏了翁・楊萬里の語多くして、又た兼ねて陸九淵を推す。歐陽脩・蘇軾の文を極稱して、又た「司馬光の『資治通鑑』すら且つ虚しく精力を費すと爲す。何ぞ況や呂祖謙の『文鑑』をや」と謂ふ。既に張栻の説を引き「詞科習ふ可からず」と謂ひ、又た眞德秀の説を引き「詞科當に習ふべし」と謂ふ。大抵文章の士に本づきて兼ねて道學の名を慕ひ、故に毎に兩端を持して、一に歸する能はず。然れども其の主旨を要すれば、固より聖賢に謬らざるなり。陳耀文の『學林就正』其の馮京の「偷狗の賦」を載するは乃ち滕元發の事を摺摭し、京に僞託するを譏る。今『侯鯖錄』載する所の滕の賦を検するに、信に然り。蓋し是の書多く事に困りて論を抒べ、甚だしくは事を記すを以て主

中國詩文論叢 第二十八集

と爲さず。偶たま傳聞に據りて、復た考核せず、其の疏漏固より異とするに足らざるのみ。⁽¹⁾

これに據れば、『鶴林玉露』の體例は「詩話・語録の間」に在るが、歐陽脩・蘇軾などの「文章の士」を極稱しながら、一方で朱子・張栻などの「道學の名」を慕っており、その立脚點が定まっていらない。更にこの書は個々のエピソードに基づいて議論を展開しているだけであって、そのエピソードもたまたま聞いた「傳聞」に依據しているだけで、その眞偽を確かめてもおらず、甚だ「疏漏」である、と評して手厳しい。しかし、書籍の入手・閲覽に相當の困難を伴った當時の状況を考えれば、記事の多くを「傳聞」に依據するのも無理からぬことであるし、またその「傳聞」の中には史籍の缺を補うに足る、多くの貴重な逸話が含まれており、『鶴林玉露』の史學資料的價值を損なうものではなからう。⁽²⁾

それよりも注目すべきは、『鶴林玉露』が「詩話・語録の間」に在り、且つ朱子・張栻などの「道學の名」を慕って、多くその言論を引用・參照していることである。中でも朱子に對する尊崇の念がとりわけ強いと感ぜられる。試みに『鶴林玉露』に載せる全四百八十九條の記事に、『四庫全書總目

提要』が指摘する道學家の名（朱子・張栻・眞德秀・魏了翁・楊萬里・陸九淵）がどれほど現れるか、左に抽出してみよう。

朱子——62條

張栻——19條

眞德秀——14條

魏了翁——11條

楊萬里——36條

陸九淵——9條

勿論、朱子は思想上・政治上に於いて當時已に著名人となっており、そのネームヴァリューの高さは考慮に入れねばならないが、それでもその出現頻度の高さは注目に値する。このような情況は容易に看取できるものであり、夙に明、葉廷秀撰『葉潤山先生全書』第十六冊所收「詩譚續集題識」に、

其の言紫陽（朱子）を以て鵠と爲し、學術・治道多く發明有り。而うして王道を離れず。甚だしきかな、其の詩教に補有るや。⁽³⁾

と指摘されている。右に云う「詩教に補有」りとは、元來『詩經』特有の「溫柔敦厚」の教育効果を言うが、同時に詩

歌全般の廣い教化が期待されることをも意味している筈で、それは恐らく、『鶴林玉露』の特徴の一つである「詩話」としての側面を指摘しているものと思われる。

『鶴林玉露』が一方で詩話としての一面を持つという情況も、通編を粗讀してみれば判ることであり、同様に『鶴林玉露』に載せる全四百八十九條の記事中より、詩話的色彩の強い條——詩歌が話題の中心となるものや、或る詩歌から説き起こして議論を展開させているものなど——を抽出してみると、大率百五十餘條、全體の略ぼ三分の一に當たる分量が見出される。

つまり、『鶴林玉露』という書物は、羅大經という「道學家」(王瑞來點校『鶴林玉露』の〈點校說明〉の中で已に「理學家」と位置づけている)が著した、一種の「詩學書」(趙建軍「羅大經の詩學思想」という論文が已に世に問われている⁽⁴⁾)と見ることも可能なのである。

本稿は、『鶴林玉露』に散見する朱子尊崇の念を手が掛かりに、南宋期に入って思潮の一角を形成するに到った「道學」(「理學・朱子學」という思想が、詩の創作及び詩學思想にどのような影響を與えたのか、その背景に朱子學派の形勢と思想の繼承がどのように絡み合っているのか、という點につい

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念(後藤)

て考察を試みんとするものである。

一 詩話としての『鶴林玉露』と朱子の影響

上述の如く、『鶴林玉露』の中には多くの詩話的記事が見出せるが、まずは他の詩話にも聞か見られる、作詩上の技巧に關する記事を紹介しよう。

詩を作るは健字の撐拄するを要し、活字の斡旋するを要す。「紅入りて桃花嫩にして／青歸りて柳葉新たなり」(杜甫「奉酬李都督表丈早春作」詩)・「弟子貧原憲／諸生老伏虔」(同「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻」詩)の如し。「入」と「歸」との字、「貧」と「老」との字、乃ち撐拄せるなり。「生理何の顔面ぞ／憂端且く歲時なり」(同「得弟消息二首」其二)、「名は豈に文章もて著れんや／官は應に老病もて休むべし」(同「旅夜書懷」詩)、「何」と「且」との字、「豈」と「應」との字、乃ち斡旋せるなり。撐拄は屋の柱有るが如く、斡旋は車の軸有るが如し。文も亦た然り。詩は字を以てし、文は句を以てす。⁽⁵⁾

(甲編・卷六)

中國詩文論叢 第二十八集

右は、句を形作る上では、支えとなる眼目の文字が必要な場合や、言葉同士を繋げて展開を圖る爲の文字が必要な場合を、杜甫詩を例に説明したものである。この作詩方面に關する記事に分類し得るものとしては他に、専ら散文で用いられる「矣」「焉」等の虚字を詩中に用いた例を紹介する（詩用助語）（乙編・卷二）、「遮莫」（和訓「さもあらばあれ」という語を禁止の意で用るのは誤りであることを説く〈遮莫〉（丙編・卷一）などがある。

最初に引いた『四庫全書總目提要』では、『鶴林玉露』は歐陽脩・蘇軾などの「文章の土」を極稱していると評していたが、通覽するに、作詩の究極の手法として羅大經の心中に在ったのは、右の二人ではなく、どうやら唐の杜甫であつたらしい。歐陽脩・蘇軾の名は『鶴林玉露』にそれぞれ17回・52回登場するのに對して、杜甫は53回。蘇軾と略ぼ同數であるが、詩が引かれる回數は蘇軾のそれを遙かに凌駕する。

杜少陵の絶句に云ふ、「遲日 江山 麗しく／春風 花艸 香し／泥 融けて 燕子 飛び／沙 暖くして 鴛鴦 睡る」
（「絶句二首」其一）と。或ひと謂へらく此 兒童の屬對と何を以て異らんと。余曰く、然らず。上の二句は

兩閒意を生ずるに非ざるは莫きを見はし、下の二句は萬物性に適はざるは莫きを見はす。此に於てして之を涵泳し、之を體認すれば、豈に以て吾が心の眞樂を感發するに足らざらんや。大抵古人の好詩は、人の如何にして看るかに在り、人の把りて甚麼の用を做すかに在り。「水流るも心は競はず／雲 在りて 意は俱に遲し」（「江亭」詩）、「野色 更に無く 山 隔斷し／天光 直ちに水と相ひ通ず」⁽⁶⁾、「樂意 相ひ關して 禽 對語し／生香 斷ぜず 樹 交ごも花ひらく」⁽⁷⁾等の句の如きは、只だ把りて景物と做して看るも亦た可なり。把りて道理と做して看れば、其の中に亦た儘く玩索す可き處有り。大抵詩を見るは、胸次の玲瓏活絡たるを要す、と。⁽⁸⁾

右は、全對格で作られた杜甫の「絶句二首」其一が、子供が作するようなありふれた對句ばかりではないかと訝る人に對して、そうではないと羅大經が反論するものである。羅大經は、件の杜詩は上の二句で、天地の間で春の息吹が活潑潑地と息づいていることを表しており、下の二句で、燕や鴛鴦を含む萬物がそれぞれに賦與された「性」に安らぎ、のどかに調和した状態にあることを表しているのだ、と主張する。そ

してその世界に身を委ねて本性を「涵泳」（涵養）し、理氣の調和を「體認」すれば、心の「眞樂」が「感發」されるのだ、と言う。「性」「涵泳」「體認」「感發」など、まさしく理學の用語・概念で杜詩を解釋し、且つ稱揚したものであり、この点からも道學派の影響度は高いと見ることが出来るのはなからうか。

周知の如く、宋代に到って陶淵明と杜甫を尊崇する風潮が起こり、それは北宋・南宋を通じて士大夫間の共通理念となつてはいるが、右の引用文中の「樂意 相ひ關して禽 對語し／生香 斷ぜず 樹 交こもごも花ひらく」は『朱子語類』卷九七〈程子之書・三〉にも引かれており、この二句に對して程子は、「以て浩然の氣を見得す可し」と云い、朱子は、

此 只だ是れ間斷無きの意なるのみ。「相ひ關して對語す」
「斷ぜず交こもごも花ひらく」を看れば、便すなはち見得す。⁽⁹⁾

と云っており、理學思想の繼承の過程で杜甫尊崇の念が極度に強くなったのではないか、と感ぜられる。次に引く李・杜の優劣を論ずる條はその典型であろう。

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念（後藤）

李太白 王室多難、海宇橫潰の日に當りて、歌詩を作爲するも、豪俠氣を使ひ、花月の間に狂醉するに過ぎざるのみ。社稷・蒼生、曾て其の心胸に繫かけず、其の杜少陵の憂國・憂民に視くぶれば、豈に同年に語る可けんや。唐人つね毎に李・杜を以て並稱す。韓退之 識見 高邁なるも、亦た惟だ「李杜の文章在り、光燄 萬丈 長し」と曰ふのみにして、優劣する所無きなり。本朝の諸公に至りて、始めて少陵を推尊するに至る。東坡 云ふ、「古今の詩人多し。而して惟だ杜子美を以て首と爲すのみ。豈に其の飢寒 流落するも、一飯も未だ嘗て君を忘れざるを以てするに非ざらんや」と。又た曰く、『北征』の詩 君臣の大體を識る。忠義の氣、秋色と高きを爭ひ、貴ぶ可きなり」と。朱文公 云ふ、「李白 永王璘の反するを見て、便ち之に従史す。詩人 頭腦を沒すること此くの如きに至る。杜子美 稷・契せつを以て自ら許すも、未だ做し得るや否やを知らず。然れども子美 卻て高し。其の房琯を救ふは亦た正し」と。⁽¹⁰⁾

（内編・卷六）

右の條は、李白と杜甫をその詩の藝術的價值から論じようというのではなく、それぞれの忠君愛國の度合いから、李白

中國詩文論叢 第二十八集

を貶め杜甫を稱贊するものである。餘りにも教場的と言ってしまえばそれまでであるが、着目すべきは、羅大經が展開した議論を蘇軾の説を引いて補強し、最後に朱子の説を引いて議論の締め括りとする點である。即ち思索の正否に關する決定權を朱子に委ねているのである。

このような事例は右に引いたものだけに止まらず、他に、辛棄疾の詞を幾つか紹介した上で、「朱文公云ふ、『辛幼安・陳同甫、若し朝廷賞罰明かなれば、此等の人皆な用ふ可し』と」と朱子の稱贊の辭で締め括る〈辛幼安詞〉（甲編・卷一）、陸游の詩名が高いことを褒め稱えた上で、最後に「晩年の詩和平粹美にして、中原承平の時の氣象有り。朱文公喜んで之を稱す」と述べる〈陸務觀〉（甲編・卷四）、王安石の「示平甫弟」詩の一節「豈無他憂能老我／付與天地從今始（豈に他憂の能く我を老いしむる無からんや／天地に付與するは今從り始めん）」を引いた上で、單に「朱文公毎に喜んで之を誦す」と言い添える〈付與天地〉（甲編・卷六）などがある。後の二つは、單に或る詩句が朱子のお氣に入りであると紹介するだけであるが、その裏には、「朱子という最も見識の高い方から評價を得ているのだから、その素晴らしさはあなた方にも判るでしょう」という口吻が見て取れそうだ。

今一つ、羅大經の朱子尊崇の念をとりわけ印象づける條が、次に引く〈朱文公論詩〉（甲編・卷六）である。

①胡澹庵章を上り、詩人十人を薦む。朱文公焉に與る。文公樂まず。復た詩を作らざらんことを誓ふも、迄に作らざる能はざるなり。嘗て張宣公と共に南嶽に遊び、唱酬百餘篇に至る。忽ち瞿然として曰く、「吾が二人詩に荒むこと無きを得んや」と。

②楊宋卿詩集を以て品題を求むるに、公之に答へて曰く、「詩なる者は、志の之く所にして、豈に工拙有らんや。亦た其の志の高下の如何を觀るのみ。是を以て古の君子、德以て其の志を求むるに足れば、必ず高明純一の地に出でん。其の詩に於ては固より學ばずして之を能くす。格律の精粗、用韻・屬對・比事・遣詞の善否に至りては、今魏晉以來の諸賢の作を以て之を考ふるに、蓋し未だ意を其の間に用ふる者有らず。而るを況んや古詩の流に於てをや。近世の作者は、乃ち始めて情を此に留め、故に詩に工拙の論有り、葩藻の詞勝り、言志の功隠れたり」と。

③又た曰く、「古今の詩凡そ三變す。蓋し書傳載する所

自り、虞夏以來、漢・魏に及ぶまで、自ら一等と爲す。晉・宋の間の顔・謝自り以後、下唐初に及ぶまで、自ら一等と爲す。沈・宋自り以後、律詩を定著し、下今日に及ぶまで、又た一等と爲す。然れども唐初自り以前、其の詩を爲る者、固より高下有るも、法は猶ほ未だ變ぜず。律詩出づるに至つて、而る後詩と法と始めて皆な大いに變じて、以て今日に至り、益ます巧に益ます密にして、復た古人の風無し。故に嘗て妄りに經・史の諸書に載する所の韻語を抄取し、下『文選』・漢魏の古詞に及びて、以て郭景純・陶淵明の作る所に盡きて、自ら一編と爲して、三百篇・『楚辭』の後に附して、以て詩の根本・準則と爲さんと欲す。又た其の下二等の中に於て、其の古に近き者を選び、各おの一編と爲して、以て之が羽翼・輿衛と爲す。其の合せざる者は、則ち悉く之を去り、其をして吾の耳目に接して、吾の胸次に入れ使めず。要す方寸の中をして一字の世俗の言語・意態無から使むれば、則ち其の詩高遠を期せずして自ら高遠ならん」と。

④又た曰く、「來喻六藝の芳潤に漱きて、以て眞澹を求めんと欲す。此誠に極至の論なり。然れども亦た須く

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念（後藤）

先づ古今の體製・雅俗の響背を識得し、仍りて更に腸胃の間の夙に生ぜる輩血・脂膏を洗滌し得て盡くすべし。然る後此の語方に措く所有らん。如し其れ未だ然らずんば、竊かに穢濁主と爲りて、芳潤入り得ざらんことを恐るるなり。近世の詩人、只だ曾て此の關を透り得ずして、近局に規規たるに緣り、故に其の就す所、皆な人意に満たず、深く論ずるに足る無し」と。

⑤又た曰く、「詩を作るは須く陶・柳の門庭中從り來りて乃ち佳なるべし。是くの如くせずんば、以て蕭散冲澹の趣を發する無く、古人の佳處に到るに由無し」と。

⑥又た曰く、「詩を作るに六朝に學ばず、又た李・杜に學ばず、只だ那の巉嶮なる底に學ぶ。便ひ學びて十分に好きを得たる後たりとも、把りて什麼の用を作さんや」と。公の詩を論ずる、本末兼該すと謂ふ可きなり。

⑦公嘗て廣成子の像に題して云ふ、「陳光澤此の像を見示するに、偶たま李太白の詩を記す。云ふ、『世道日に交ごも喪ひ／澆風淳源を變ず／桂樹の枝を求めず／反つて惡木の根に棲む／所以に桃李の樹／花を吐けども竟に言はず／大運興沒有り／群動飛奔するが若し／歸り來りて廣成子／去入窮門無し』と。因りて寫して以

中國詩文論叢 第二十八集

て之に示す。今人命を捨てて詩を作るに、口を開けば便ち李・杜を説く。此を以て之を觀れば、何ぞ曾て夢に他の脚板を見んや」と。

⑧又た言ふ、「余平生王摩詰の詩を愛す。云ふ、『漆園傲吏に非ず／自ら缺く經世の具／偶たま奇す一微官／婆娑たり數株の樹』と。以て及ぶ可からずと爲して、舉げて以て人に語るも、領解する者少なし」と。此を觀れば、則ち公の取る所、概ね見る可きなり。

⑨公嘗て作る所の絶句を舉げ似し學者に示して云ふ、「半畝の方塘一鑑開き／天光雲影共に徘徊す／渠に問ふ那ぞ清きこと許くの如くなるを得たと／源頭の活水の來たる有るが爲なり」と。蓋し物に借りて以て道を明かにするならん。

⑩又た嘗て其の詩を誦し學者に示して云ふ、「孤燈寒燄耿として／此の一窗を照らして幽なり／臥して簷前の雨を聽けば／浪浪として殊に未だ休まず」と。曰く、「此眼前の語と雖ども、然れども心源の澄靜なる者に非ざれば道ふ能はず」と。此を觀れば、則ち公の作る所、又た概見す可きなり。

詩話としての色彩を色濃く持つ『鶴林玉露』中に在って、個人の詩論を纏めて紹介するのは、この朱子に對してのみである。長い引用となるので便宜上、通し番號を付した。これら十項目の朱子の詩論を検するに、

①朱子が胡銓（號は澹庵）によって、詩人の資質を以て朝廷に推薦されたのは乾道六年（一一七〇）十二月。周必大（一一二六—一二〇四）の「王庭珪行狀」等に記載があるが、朱子が「樂まず、復た詩を作らざらんことを誓」ったとの記載は見當たらず。また「吾が二人……」は、乾道三年に書かれた張栻の「南嶽唱酬序」（『南軒集』卷十五）であるが、文字の異同が所々にあり、尙且つ詩を作るまいと誓ったのは、別の理由である。

②は朱子の書翰「答楊宋卿」（『朱文公文集』卷三九、以下『文集』と稱す）の一節。

③④は朱子の書翰「答鞏仲至」（『文集』卷六四）の一節であるが、所々省略が見られる。

⑤は南宋、李幼武纂集『宋名臣言行錄』外集卷十二に見える記事。李幼武の『宋名臣言行錄』には「景定辛酉」（景定二年、一二六一）の序がある。

⑥は『朱子語類』卷一四〇〈論文・下詩〉に見える朱子

の言葉。

⑦は朱子の題跋「題李太白詩」(『文集』卷八四)。「今人命を捨てて」云々も朱子の言葉。

⑧は朱子の題跋「跋楊子直所賦王才臣絕句」(『文集』卷八四)。引用には羅大經の手が加えられている。

⑨に引かれる詩は朱子の「觀書有感二首」其一(『文集』卷二)。また、これを弟子に示したという點については、朱子の書翰「答許順之」(『文集』卷卷三九)がこれに該當する。

⑩に引かれる詩は朱子の「試院雜詩五首」其二(『文集』卷一)に相當すると思われるが、所々文字に異同があるので、『文集』卷一に載せる當該詩を以下に紹介する(文字の異同のある箇所には傍點を付す)。

寒燈耿欲滅 照此一窗幽
坐聽秋簷響 淋浪殊未休

また、「此眼前の語と雖ども」云々の記載は、『文集』『朱子語類』等には見當たらぬ。此に關して、李恆老編著『朱子大全筭疑輯補』(延世大學中央圖書館版、韓國學資料院影印、一九八五)卷一の當該條では、

『鶴林』玉露』引く所の先生の事、往往にして之を傳

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念(後藤)

聞の間に得れば、未だ深くは信ず可からず。此の詩先生の少時の作に係り、應に自ら許すこと此くの如くなるべからず。¹³⁾

と疑義を呈している。

確かに右の詩は、紹興二十三年(一一五三、朱子二十四歳)、同安縣主簿に赴任した際に作られた可能性が高く、また①の逸話に矛盾が含まれることは明らかである故、この逸話に關しても信を置けないかも知れない。しかし、晩年の朱子が若かりし頃に作った作品を思い出し(またそれ故に不鮮明な記憶に頼って文字の出入を生じ)、些かの自負を込めて弟子達に歌い聞かせた可能性も考えられないことではない。

今一度翻って先の朱子の詩論を考えてみると、羅大經はこれを纏めるに際して、『文集』に止まらず『朱子語類』等の諸書にこつこつと當たっていた可能性が高く、たとい一部傳聞に頼っていたとしても、朱子のみに大きな紙幅を裂いて詩論の集成を試みたことを考え合わせれば、決して安易に筆を染めたものではない筈である。言い換えれば、朱子の詩論を初めて纏めたのは羅大經であり、そこには朱子に對する尊崇の念の他に、朱子の(少なくとも朱子詩及びその詩學思想の)最

中國詩文論叢 第二十八集

良の後繼者という自負の念をも抱いていたのではなからうか。聞々傳聞に頼っていたから信用できないと斬って捨てるのは、餘りに早計であろう。そしてこれは、『鶴林玉露』にのみ記載される二つの（右の⑩の條を含めれば三つとなる）朱子詩軼事の信頼性にも関わって來る問題なのである。次にその二つの軼事を紹介しよう。

二、『鶴林玉露』にのみ見える朱子詩軼事

まず一つめは、乙偏・卷六に載せる次のもの。

胡澹庵 十年 海外に眩せられ、北歸の日、湘潭胡氏の園に飲するに、詩を題して云ふ、「君恩 歸るを許して此に一たび酔ふ／傍に梨頬の微渦を生ずる有り」と。侍妓黎倩を謂ふなり。厥の後 朱文公之を見て、絶句を題して云ふ、「十年 海に浮びて一身 輕し／歸りて黎渦に對すれば却て情有り／世上 人欲の險に如くは無し／幾人か此に到りて平生を誤まる」と。『文公全集』此の詩を載せて、但だ題して「自警」と曰ふのみと云ふ。

（中略）

乃ち 尤物は人を移し、大智・大勇と雖も免るる能はざ

るを知る。是に由りて之を言へば、「世上 人欲の險なるに如くは無し」とは、信なるかな。

ここで話題の中心になっているのは、『文集』卷五に收められる「宿梅溪胡氏客館觀壁間題詩自警二絕」其二の詩である（同様に、文字の異同のある箇所には傍點を付す）。

十年湖海一身輕	十年湖海一身輕し
歸對黎渦却有情	歸りて黎渦に對すれば 却て情有り
世路無如人欲險	世路 人欲の險に如くは無し
幾人到此誤平生	幾人か此に到りて 平生を誤まる

これは、乾道三年（一一六七）冬十一月、南嶽衡山の周遊を終えて、家族の待つ崇安へ歸る途上で作られたものである。しかし『文集』の詩題から判明するのは、「梅溪」という地で「胡氏の客館」（或いは「梅溪」出身の「胡氏」の「客館」）に宿った際に、宿の壁に書き付けられていた詩を目にして、自らを警める詩を朱子が作ったことしか判明しない。この時、朱子が見た詩は誰のどのような作であったのか、なぜ朱子をして身を引き締めねばならないと自覺せしめたのか、皆目見

當が付かないのである。

しかし右に掲げた『鶴林玉露』の記載の御蔭で、まずその詩の作者が胡銓（一一〇二—一一八〇）であると判明する。秦檜に疎まれ長らく流謫の身となっていた胡銓は、秦檜の死後、中央に歸ることを許され、その歸途、この客館に立ち寄る。その時宴會の席で黎倩という妓女を見初めて得意絶頂となり、「君恩 歸るを許して此に一たび酔ふ／傍に梨頬の微渦を生ずる有り」という詩を壁に書き付けた。朱子が目にしたのはこの詩であり、妓女の愛くるしい笑窪に心を奪われたことを士大夫たる者が得意げに詩に詠ずるとは何事だ、という怒りと同時に、自分もうっかりすると胡銓の二の舞になるやも知れないという警戒感が湧き起こり、右の詩を作ったことまでもが了得されるようになるのである。

また、右の條では、胡銓が曾て宿ったのは「湘潭、胡氏の園」であることが記されており、往時、長沙を中心とする湖南一帯の地は廣く「湘潭」と呼ばれていたことから考えて、右の詩は、櫛州（現湖南省株洲市）で張栻と別れて間もなくの日に作られたであろうことも推察されるのである。

『續資治通鑑』に據れば、胡銓が新州（現廣東省新興市）に貶謫せられたのは紹興十二年（一一四二）、許されて衡州（現

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念（後藤）

湖南省衡陽市）に量移されたのは、紹興二十五年（一一五五）。「君恩 歸るを許して……」詩を胡銓が作ったのは丁度その頃のことと判明する。但し、胡銓の別集『澹庵文集』はその没後二十年目の慶元五年（一一九一）に門人達の支援によって七十卷の規模のものが上梓されたが、どのような経緯があったのだろうか、現在『四庫全書』に收められる『澹庵文集』は僅か六卷しか無く、詩も寥々十七首のみで、残念ながら、當時胡銓が有頂天になって作った問題の詩の全貌は判らない。もう一つの軼事は、乙偏・卷五に載せる次のもの。

朱文公に足疾有り、嘗て道人有りて爲に鍼熨の術を施せば、旋ち輕安なるを覺ゆ。公大いに喜び、厚く之に謝し、且つ贈るに詩を以てして云ふ、「幾載か相ひ扶けられて瘦筇を藉る、一鍼還た奇功有るを覺ゆ。門を出でて杖を放てば 兒童 笑ふ、是れ從前の勃窣の翁ならず」と。道人 詩を得て徑ちに去る。未だ數日ならずして、足疾 大いに作り、未だ鍼せざる時よりも甚だし。亟かに人をして道人を尋逐せ令むるも、已に其の往く所を知る莫し。公歎息して曰く、「某之を罪せんと欲するに非ず、但だ其の詩を追索せんと欲するのみ。其の此を持

中國詩文論叢 第二十八集

して他人を誤たしむるを恐るるのみ」と。⁽¹⁶⁾

この條で話題の中心になっているのは、『文集』卷九に收められる「晦翁足疾得程道人鍼之而愈戲贈此詩」と題された七絶である（やはり、文字の異同のある箇所には傍點を付す）

十載扶行持短筇　十載扶行して短筇を恃む
一鍼相値有奇功　一鍼相値^あひて奇功有り
出門放歩人爭看　門を出でて歩を放てば人爭ひ看る
不是前來勃率翁　是れ前來の勃率の翁ならずと

右の詩はその詩題から、足の痛みに悩まされていた朱子の許に「程道人」なる道師が現れ、鍼を打って貰ったところ、足の痛みが嘘のように癒えたので、戯れにこの詩を作って道師に贈った、ということが判る。ただ『鶴林玉露』の記載に據れば、その後日談があるとのこと、詩を貰った道師はすぐさま歸って行ったのだが、數日も経たない内に足の痛みが再發し、鍼を打って貰う前に酷い痛みであった。朱子は急ぎ人を遣って道師の跡を追わせたが、已に行方知れずとなっていた。朱子は溜息をついて、「私は彼奴を罰しよう」と

したのではなく、ただ單に贈った詩を取り戻そうとしただけなのだ。彼奴が私の詩をお墨付きのように患者に見せて、結局騙してしまふのを恐れたからなのだ」と言ったという。

朱子は淳熙の初め（一一四七、朱子四十五歳）頃から、突發的に起こる足の痛みに悩まされるようになったと言われ、『文集』に收める右の詩の起句の「十載」という文字を信じれば、朱子五十五歳以降の晩年の出來事と思われる（朱子の生卒年は一一三〇—一二〇〇）。ただ、この詩に關して言えば、『鶴林玉露』の記事は、その裏話として心に留め置く價值しかないであろう。しかしながら、だからと言ってこの手の逸話を全て、傳聞に依據した空疎な物語として片付けても良いのであろうか。逆にその傳聞の出所が朱子に近ければ近いほど、その信憑性も増すのではないだろうか。この點を更に詰める爲に、最後に作者羅大經の事跡を考察し、朱子との接點を探ってみたい。

三、作者羅大經について——結びに代えて——

作者の羅大經は『宋史』に傳が立てられておらず、生卒年を含めてその事績には不明な點が多い。ここでは王瑞來「羅大經平生事跡考」（中華書局『鶴林玉露』「一九八三」所收、及

び同『鶴林玉露』著者羅大經に關する再考」(『東洋文化研究』六號「學習院大學東洋文化研究所編、二〇〇四年三月」所收)に依據して、羅大經の事跡の概略を確認してみたい。

それらの考證に據れば、羅大經は字は景編、廬陵(正確には吉州吉水。現江西省吉水縣)の人。同郷の先輩に詩人として名を馳せた楊萬里(字は廷秀、號は誠齋。一一二七—一二〇六)、及びその長子の楊長孺(字は伯大、號は東山)がいる。羅大經の父は、『鶴林玉露』甲編・卷三の「畏説」の條に「竹谷老人」として登場する人で、名は羅茂良。楊長孺と同世代の人と目される。四部叢刊本『誠齋集』の各卷の卷末に、「嘉定元年春三月男長孺編定／端平元年夏五月門人羅茂良校正」の刊記があることから、羅大經の父は楊萬里の門人であったことが判明し、羅大經にとって楊萬里(ひいては朱子も)は祖父の世代の人となる。乙編・卷四の「月下傳杯詩」の條に、「余年十許歳の時、家君竹谷老人に侍して誠齋に謁するに、親しく誠齋の此の詩を誦するを聞く」とあり、これは楊萬里が故郷に退休していた時期のことと推察される。當時十數歳であつた羅大經が楊萬里にお目見えたということであるから、これより羅大經の生年は慶元元年(一一九五)より以前であつたろうと見積もることが出来る。

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念(後藤)

その後、學問を積んだ羅大經は、寶慶二年(一二二六)に進士登第(『吉水縣志』卷二八「選舉志」の「寶慶二年丙戌進士」の條に「羅大經」の名が見える)、三十一歳頃のことと思われる。すぐに任官とは行かず、端平元年(一二三四)頃に容州(現廣東省容縣)の法曹掾となり、その後暫くして淳祐十一年(一二五一)に撫州(現江西省撫州市)の軍事推官となつたが、やがて政争に巻き込まれて官を罷め、晩年は故郷にて隱遁生活を送つたものと思われる。『鶴林玉露』の甲乙丙各編には羅大經の自序が冠せられており、それらに據れば、甲編に「淳祐戊申」の自署、乙編に「淳祐辛亥」の自署、丙編に「淳祐壬子」の自署がそれぞれあることから、甲編は淳祐八年(一二四八)、乙編は同十一年(一二五一)、丙編は同十二年(一二五二)に完成したことが判明。官僚生活の晩年四、五年程の間に書かれ、隱遁後は増補することは無かつたらしい。尚、羅大經の卒年については全く資料が存在せず、淳祐十二年(一二五二)以後としか言えない。

さて、こうして羅大經の事跡を見て來たところで、朱子との接點を探るとしたら、やはり郷土の誇りである所の楊萬里及び楊長孺父子が最上位となろう。幼い頃の羅大經にとって、恐らく父の師である楊萬里にまず尊崇の念を抱いたと思

中國詩文論叢 第二十八集

われる。朱子と楊萬里とは生前交流があり、書翰の往復や詩の酬答も何度か行われていた。更に淳熙十二年（一一八五）、當時中央政界の要職にあった楊萬里は、朝廷に薦める人材の中に朱子の名を記して、朱子を抜擢するよう進言したこともあった。その後、紹熙五年（一一九四）今度はその息子の楊長孺が、知潭州として長沙に赴任する途中の朱子を臨江軍で待ち受け、朱子に質問狀を差し出して教えを請うているのである。父と同世代の楊長孺も朱子の學問に惹き付けられて行ったのであるからには、その成長の過程で道學を、ひいては朱子を尊崇する念が、知らず知らずの内に醸成されていたのであろう。羅大經の青年期には、朱子は已にこの世を去っていたと思われるが、逆にその心の中の朱子像は神格化され、信仰の對象とすらなっていたのではなからうか。朱子に教えを請うた楊長孺は、以後、朱子の門弟達とも交際を發展させた可能性が高い。よってその間に見聞した朱子門下の軼事を、直接羅大經に語って聞かせた可能性も高い筈なのである。そのような環境の中で、羅大經にとって朱子門下の諸相はいっしょに馴染み深いものとなったのではなからうか。

今一つ考えられる手掛かりは、羅大經の作詩に對する情熱と相當程度有していたと思われるその技量であらう。『鶴林

玉露』の中で羅大經は、古今の著名な詩人を紹介・稱揚するばかりではなく、議論の餘技として自らの詩作についても十首ほど記録しているのである。朱子も詩人としての色彩を色濃く持つ學者であり、羅大經はそのような點にも強い共感を抱いたのではなからうか。

ともあれ、今までは、内容に余り信を置けない宋代筆記の一つとして『鶴林玉露』は認識されていたと思われるが、朱子の詩及びその詩學思想を研究する上では、重要な資料となり得ることを、茲に假説として提出し、再評價を促したいのである。

【注】

- (1) 「鶴林玉露十六卷、兩江總督採進本、宋羅大經撰。大經字景綸、廬陵人。事蹟無考、惟所記竹谷老人畏說一條、有同年歐陽景顏語、知嘗登第。又高登忤秦檜一條、有『爲容州法曹掾』語、知嘗官嶺南耳。其書體例在詩話、語錄之間、詳於議論而略於考證。所引多朱子、張栻、眞德秀、魏了翁、楊萬里語、而又兼推陸九淵、極稱歐陽脩、蘇軾之文、而又謂司馬光資治通鑑且爲虛費精力、何況呂祖謙文鑑。既引張栻之說謂詞科不可習、又引眞德秀之說謂詞科當習。大抵本文章之士而兼慕道學之名、故每持兩端、不能歸一。然要其大旨、固不謬於

聖賢也。陳耀文學林就正譏其載馮京偷狗賦乃摺摭滕元發事、僞託於京。今檢侯鯖錄所載滕賦、信然。蓋是書多因事抒論、不甚以記事爲主。偶據傳聞、不復考核、其疏漏固不足異耳。」

〔子部卷一二——子部三——雜家類五〕

- (2) 清、曾釗『面城樓集鈔』卷二「鶴林玉露跋」では、「蓋詳於議論略於考訂、大抵宋人說部多然。然書中如韓平原爲南尉、秦檜自金歸諸條、亦足補史之未備也」と言い、王瑞來點校『鶴林玉露』（中華書局、一九八三）の〈點校說明〉の條では、『鶴林玉露』中の幾つかの記事を例示した上で、「這些記載、或可與史乘互證、或可補闕訂誤」と言い、更に「此書還記載了宋代一些政治、軍事、禮儀制度、也很有價值」と評している。

- (3) 「……其言以紫陽爲鵠、學術治道多有發明、而不離王道。甚矣、其有補於詩教也。……」

- (4) 『陰山學刊』第二十一卷第五期（二〇〇八年一〇月）所收。

- (5) 「作詩要健字撐拄、要活字斡旋、如紅入桃花嫩、青歸柳葉新、弟子貧原憲、諸生老伏虔。入與歸字、貧與老字、乃撐拄也。生理何顏面、憂端且歲時、名豈文章著、官應老病休、何與且字、豈與應字、乃斡旋也。撐拄如屋之有柱、斡旋如車之有軸、文亦然。詩以字、文以句。」

- (6) この二句は杜甫の詩ではなく、北宋、滕元發「月波樓」詩の一節（南宋、周紫芝『竹坡詩話』に引く。尚、後ろの句は「天光直與水相連」に作る）。

『鶴林玉露』に見る朱子尊崇の念（後藤）

- (7) これも杜甫の詩ではなく、南宋、胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷三十二に據れば、北宋、石曼卿（石延年）「題章氏園亭」詩の一節。

- (8) 「杜少陵絕句云、遲日江山麗、春風花艸香、泥融飛燕子、沙暖睡鴛鴦。或謂此與兒童之屬對何以異。余曰、不然。上二句見兩間莫非生意、下二句見萬物莫不適性。於此而涵泳之、體認之、豈不足以感發吾心之真樂乎。大抵古人好詩、在人如何看、在人把做甚麼用。如水流心不競、雲在意俱遲、野色更無山隔斷、天光直與水相通、樂意相關禽對語、生香不斷樹交花等句、只把做景物看亦可、把做道理看、其中亦儘有可玩索處。大抵看詩、要胸次玲瓏活絡。」

- (9) 「……此只是無間斷之意、看相關對語、不斷交花、便見得。」

- (10) 「李太白當王室多難、海宇橫潰之日、作爲歌詩、不過豪俠使氣、狂醉於花月之間耳。社稷蒼生、曾不繫其心胸、其視杜少陵之憂國憂民、豈可同年語哉。唐人每以李、杜並稱、韓退之識見高邁、亦惟曰、李杜文章在、光燄萬丈長。無所優劣也。至本朝諸公、始至推尊少陵。東坡云、古今詩人多矣、而惟以杜子美爲首、豈非以其飢寒流落、而一飯未嘗忘君也與。又曰、北征詩識君臣大體、忠義之氣、與秋色爭高、可貴也。朱文公云、李白見永王璘反、便從史之、詩人沒頭腦至於如此。杜子美以稷契自許、未知做得與否、然子美卻高、其救房琯亦正。」
- (11) 「胡澹庵上章、薦詩人十人、朱文公與焉。文公不樂、誓不復作詩、迄不能不作也。嘗同張宣公遊南嶽、唱酬至百餘篇。」

中國詩文論叢 第二十八集

忽瞿然曰、吾二人得無荒於詩乎。楊宋卿以詩集求品題、公答之曰、詩者、志之所之、豈有工拙哉。亦觀其志之高下如何耳。是以古之君子、德足以求其志、必出於高明純一之地、其於詩固不學而能之。至於格律之精粗、用韻屬對比事遣詞之善否、今以魏晉以來諸賢之作考之、蓋未有用意於其間者、而況於古詩之流乎。近世作者、乃始留情於此、故詩有工拙之論、葩藻之詞勝、言志之功隱矣。又曰、古今之詩凡三變。蓋自書傳所載、虞夏以來、及漢魏、自爲一等。自晉宋閒顏謝以後、下及唐初、自爲一等。自沈宋以後、定著律詩、下及今日、又爲一等。然自唐初以前、其爲詩者、固有高下、而法猶未變。至律詩出、而後詩之與法始皆大變、以至今日、益巧益密、而無復古人之風矣。故嘗妄欲抄取經史諸書所載韻語、下及文選漢魏古詞、以盡乎郭景純、陶淵明之所作、自爲一編、而附於三百篇楚辭之後、以爲詩之根本準則。又於其下二等之中、擇其近於古者、各爲一編、以爲之羽翼輿衛。其不合者、則悉去之、不使其接於吾之耳目、而入於吾之胸次。要使方寸之中、無一字世俗言語意態、則其詩不期於高遠而自高遠矣。又曰、來喻欲漱六藝之芳潤、以求真澹、此誠極至之論。然亦須先識得古今體製、雅俗嚮背、仍更洗滌得盡腸胃閒夙生輩血脂膏、然後此語方有所措。如其未然、竊恐穢濁爲主、芳潤入不得也。近世詩人、只緣不曾透得此關、而規規於近局、故其所就、皆不滿人意、無足深論。又曰、作詩須從陶柳門庭中來乃佳、不如是、無以發蕭散冲澹之趣、無由到古人佳處。又曰、作詩不學

六朝、又不學李杜、只學那嶢嶢底、便學得十分好後、把作什麼用。公之論詩、可謂本末兼該矣。公嘗題廣成子像云、陳光澤見示此像、偶記李太白詩、云、世道日交喪、澆風變淳源、不求桂樹枝、反棲惡木根、所以桃李樹、吐花竟不言、大運有興沒、群動若飛奔、歸來廣成子、去入無窮門。因寫以示之。今人捨命作詩、開口便說李杜、以此觀之、何曾夢見他腳板耶。又言、余平生愛王摩詰詩、云、漆園非傲吏、自缺經世具、偶寄一微官、婆娑數株樹。以爲不可及、而舉以語人、領解者少。觀此、則公之所取、概可見矣。公嘗舉似所作絕句示學者云、半畝方塘一鑑開、天光雲影共徘徊、問渠那得清如許、爲有源頭活水來。蓋借物以明道也。又嘗誦其詩示學者云、孤燈耿寒燄、照此一窗幽、臥聽簷前雨、浪浪殊未休。曰、此雖眼前語、然非心源澄靜者不能道。觀此、則公之所作、又可概見矣。」

(12) 詳しくは拙稿「朱子と詞一乾道三年の詞作を中心に」
『中國詩文論叢』第二十七集、二〇〇八年十二月を参照されたい。

(13) 「玉露所引先生事、往往得之傳聞間、未可深信。此詩係先生少時作、不應自許如此。……」

(14) 「胡澹庵十年貶海外、北歸之日、飲于湘潭胡氏園、題詩云、君恩許歸此一醉、傍有梨頰生微渦。謂侍妓黎倩也。厥後朱文公見之、題絕句云、十年浮海一身輕、歸對黎渦却有情、世上無如人欲險、幾人到此誤平生。文公全集載此詩、但題曰自警

云。……乃知尤物移人、雖大智大勇不能免。由是言之、世上無如人欲險、信哉。」

(15) 「朱文公有足疾、嘗有道人爲施鍼熨之術、旋覺輕安。公大喜、厚謝之、且贈以詩云、幾載相扶藉瘦筇、一鍼還覺有奇功、出門放杖兒童笑、不是從前勃窣翁。道人得詩徑去。未數日、足疾大作、甚於未鍼時。亟令人尋逐道人、已莫知其所往矣。公歎息曰、某非欲罪之、但欲追索其詩、恐其持此誤他人爾。」